

生き方を燈す南郷刺し子半纏

老沼潤さん (昭和 51 年生 虫の知らせ研究所所長 金山町)

老沼飛野さん (昭和 55 年生 金山町)



「なんだあれ?! 超かっこいい! 着たい!」

当時アメカジや古着を中心にファッションに敏感だった東京出身の老沼潤さんは、飛野さんと結婚し、南郷の盆踊りで見かけた南郷刺し子半纏に釘付けになった。

南郷出身の老沼飛野さんは、南郷刺し子の存在を知らなかった。

しかし、地元の文化祭で見かけたそれに、一瞬で心を奪われた。

「やってみたい! という気持ちは強かったけど、引きこもりがちだったから、入会するにははすごく勇気が必要だった」。

不器用で雑巾くらいしか縫えなかった飛野さんは、大きな決意で南郷刺し子会に入会した。

長くても 1 日 2 時間くらい、時間を見つけてはちくちくチクチク針を進めた。

かつて南郷刺し子半纏は、男衆が村の共同作業などに纏う晴れ着でもあり、魔除けの衣でもあった。母親や嫁、娘などが祈りを込めて刺した半纏が「自慢着」といわれるのは、刺し子半纏の出来は、男衆にとっては嫁自慢、娘自慢でもあったからだ。



一番下の三角は潤さんが大好きな山、杓刺しの中の○は、右が太陽、左が月を表している。

山に浮かぶ太陽と月には、自然に寄り添って生きていこうという決意が込められている。

「私はだいぶゆっくりだから、完成までに 2 年かかった」。

2 年間の日々の中の少しの時間、作っている時には無心のように、どこかで確実に、潤さんの存在があった。

一日一目が、飛野さんから潤さんへの思いの結晶なのだ。

「刺し子をしていると、心が落ち着く。祈り、に近いのかな」。

刺し子半纏は堰普請や上棟式などの晴れ着として着られることが多かったようだが、潤さんは一番の日常着として愛用している。

飛野さんの思いに包まれた半纏を着て、潤さんが目指すのは自然と呼応した生き方だ。

直感や第 6 感、内なる声、シンクロニシティと説明されるような、“虫の知らせ”を研究している。

「雪深く険しい自然環境の奥会津で生きるには、野生の勘を大切にしたい」。

水、空気、薪、山菜、きのこ、木の実…

自分たちが生きていくために必要なものは、すべて自然から貰い放題だ。

「虫の知らせを感じながら、環境に良い生き方をしていると、運が良くなると思う。

自然が、生き方に応えてくれるのだと思う」。

やっついて楽しいことをして、感謝を忘れなければ、魂が喜ぶ。

「毎日を大切に、じねん (自然) と生きていきたいと思う」。

太陽と月を表した“一点文”はすべての物事の出発点であり、点から線へ、線から面へ、更には立体へと広がり頂点を極める。

潤さんは、虫の知らせを感じるには、感謝の心が大切だと言う。

飛野さんは、大きな藍布に、一目一目小さな願いを込めて糸を刺す。

大切に刺し出された模様は、着る人の生き方を温かく燈す。

